メーリケの童心に觸れて

臼井竹次郎

Zuerst verstehen wir eigentlich nicht. Wir sind nur berührt.

——Emil Staiger

知恩院に鶯張りの廊下がある。有名になりすぎて商品となつてしまつたのは殘念であるが、歩くとキュッキュッと鳴る音は可愛い。恐らくこの寺に小僧として入れられた雛僧の中にはこの音を戀しい父母の聲と聞いた者も何人かはあつたらう。寺では商品として賣出してもこれを商品としない耳は必ずあるだらう。唐招提寺がまだ團體の觀光バスを受けてゐなかつた頃、金堂で説明役をする婆さんが居て、堂の扉の一つを動かしてギイと鳴る音を先づ聞かせるのであつた。扉の音に感心する者はなかつたけれども婆さんは扉の音を自分が聞くのであつた。婆さんの耳にはこの音は大日如來の善哉の聲にひびいたのかも知れない。得意の色が浮んだその顔には一種童顔の表情があつた。泉鏡花の小説には松毬を拾つて耳にあてて亡き母の聲を聞く乙女の話があつた。ケラーの詩に柔毛の童を詠んだのがあつて、つぶらな無心の童の瞳は何かを尋ねてゐる、だが誰にも答へることはできない。詩人はあそこの草むらにある蝸牛の殼を耳にあててごらんと童にすすめる。何か音がするよ。何の音か、どんな

聲か、童の耳でなければ聞えないであらう。詩人ゲースがこの詩を教へてくれた。それから好きになつた詩である。この詩を讀むといつでも、君看雙眼色　不語似無憂の句が思出される。どちらの瞳も澄んでゐる。澄んだ瞳は何を語るか。目は語らずともその耳は何かを聞いてゐる。詩人は聲なき聲を聞く。

クレーヴアズルツバツハの牧師館、メーリケは一八三四年から四三年までここに牧師として住んだ。一八三六年にテユービンゲン大學の神學部を卒業してから八年間、非常勤の牧師代理として小さな町や村を轉々として移つた。その間しばらく之を止して、束縛のない詩人作家にならうとして家庭教師をやつたり、婦人新聞の編輯人になつたりしたけれどもうまく行かず、また牧師代理に立歸つたり、一所不住の不安定な生活がつづいた。二九年に婚約したルイーゼ・ラウとは三三年に遂に別れなくてはならなくなつた。父を失つた娘の將來を案じる母親は牧師になるのやら、詩を作るのやらはつきりしない男の樣子を見ては大切な娘をやるのをしぶつたでもあらう。メーリケの手紙は殘つてゐて讀むことが出來るが、唯一筋の愛の告白が貫かれてゐる。だが、婚約を解消しなければならなくなつた時、書簡集の最後に「さよなら」といふ短い一篇の詩が載つてゐる。さよならといふこの悲みの言葉がどんな意味か、あなたは感じてゐない。あなたは落ちついた顏で、氣輕にさよならと言つた。さよなら、私は何べんも何べんも自分に言つてみた。そしてその度毎に苦しみをくり返して私の心は千々に碎けた。ここにはつつましい忍苦の響きがある。そして遍歷時代を經てやつと正式の牧師に就任したのであつたが、職務にはあまり熱心ではなく、日曜日の勤めは代理にまかせて、自分は外の芝生に寢ころんで日向ぼつこをしたこともあつたと云ふ。それはともかくとしてこの牧師館には庭に木戸があつて、黑く塗つた格子戸は蝶番が錆ついて開きにくい。開ける時軋つて音を立てる。年古りた木戸であるが聲は若いソプラノだ。或る日この木戸の軋り音はメーリケの耳になじみ深いアリアを歌つた。モーツアルトの音樂。歌劇テイトウスの中のアリア、Ach nur ein-

mal noch im Leben！ 今ひと度の逢ふこともがな。夢かとばかり驚いた詩人はもう一度戸を動かす。老いた戸はゆつくりと、はつきりと、思ひをこめて歌つた、アリアの一節を。この曲を何處から聞いて覺えたのだらうか。前にここに住んでゐた牧師に美しい孫娘がゐた。開いた窓からピアノを彈きながら澄んだ美しい聲で娘が歌つたのをこの木戸は何度も聞いたのだらう。モーツアルトの音樂が好きだつたメーリケはこんな所で思はぬ喜びを經驗した。メーリケの詩はその調べの妙音と相待つてさまざまな音のひびきがある。このアリアの歌詞を題とする詩は四五年に作られたもので、今ひとたびの逢ふこともがな。これは木戸の聲なのだ。この木戸は今ひとたびの、と誰に逢ひたがつてゐるのであらうか。何度も何度もくり返して聞いたこの音樂、しづのをだまきくりかへし昔の人を偲ぶと先づこの木戸をおとなしやかに出入りした聲の美しい娘、次いでしつけのきびしかつたその母親。きれい好きで、暑い日盛りのあと、野菜に水をやる、菜園は母親そつくりにきれいに整頓してゐる。その時牧師は町から來た友人たちを、日がかげつて來たので歸るとて立出るのを送つて出て來た。牧師は庭の四阿で友をもてなしたのだつた。話好きの長談義の好人物だつた。それも今は昔となりもう返つて來ない。後任者は先代と同じ堅氣の勤めぶりだが、誰だつて昔はよかつたと思ひ勝ちなのだ。だが後任の私たちもまたこの庭と家を殘して去つて行く時が來る。そしたら一番歸つてほしいのは先住の人たちだらうが、その次ぎには私達となるだらう。また村人の中には私たちのことを思出しながら、行きずりに朽ちかけた木戸に畑の花を飾つてくれることもあるだらう。今ひとたびの……のメロデイは流れ流れて餘韻がながく殘る。古びて朽ちたささやかな木戸から美しい音樂が流れ出て、そこからほほえましい牧師の家族が出て來る繪卷物は歌の繪本であり、牧歌である。牧師の家族は小さな庭の自然と何と調和してゐることか。世の苦を嘗めつつなほ失はれぬ童心のひびきが聞える。

メーリケが自然の愛好者であつたことはよく知られてゐる。それは周邊のなじみ深い自然であり、一木一草で

あつた。と言つてもメーリケは人を避けたわけではなかつた。「よしあしをいへばぞあらめことはぬいは木を人のいとひやはする」言問はぬ岩木の如き人、自然の中に調和する人、自然そのままの素朴さを失つてゐない人をメーリケは好んだ。「今ひとたびの」に出て來る牧師の家族の素朴さ。われわれはまた彼のモーツアルト小説の中にも素朴な百姓にめぐり合ふ。彼の描いたモーツアルト像はほんたうに童心があふれてゐる。恐らくメーリケの童心がモーツアルトの童心に觸れたのであらう。散歩の途上モーツアルトはふとある荒物屋が目に入る。そこへ小さな子供を連れた百姓男が入つて來る。桝やら刷毛やら鞭やらを買ひに來たのだが、まづ澤山の品の中から選り出す、手にとつて試してみる、それを下に置いて次の品を手に取る、また置いて次のを、そして初めの品に返つて來る。どうしても決心がつかない。店番の女の子は何度となく店を離れてはまた戻つて來る。あれにしようか、これにしようかと迷つてゐる客を對手に辛抱强く次ぎ次ぎに品物を渡す。モーツアルトは賣手にも買手にも大變興味をそそられる。百姓はやつと決心がついて買物に滿足して出て行つたが、モーツアルトの胸中にはその殘像がいつまでも止まる。一寸した買物が何とまあ大切になされることか。値段の差は極く僅かであつてもとつおいつ小心翼々として思案に思案を重ねることか。モーツアルトは家計が苦しい癖に金費ひは愼重でない。だからいつも貧乏に追ひまくられてゐる。今の百姓の買物ぶりは胸を打つものがある。その感動は百姓が家に歸つた時の有樣まで空想を呼ぶ。買物を持つて百姓は妻の所へ歸つて來る。先づ買物の仕方の自慢話が出る。子供達はみんな出て來て合財袋の開くのを待つてゐる。自分たちのもらふ土產物が出て來るかもしれない。妻は大急ぎで食べ物と自分がしぼつた果汁をとりに行く。それを當てにした夫は途中で飲食店に入るのを我慢して飲まず食はずで歸つて來たのである。それは何といふ幸せであらうか。煩はしい人間關係はなく、自然と自然の惠みにすつかり賴つてゐる幸福、たとへ自然の惠みを獲るのに汗水流さうとも。とモーツアルトは感慨に耽る。彼の生

活には全く暇がない。勿論彼の藝術は何物にも替え難いものであるが、そのためには何と煩はしい境遇に置かれなければならないことか。モーツアルトの自然愛好はプラークへの旅の始めにも出て來る。それは作者メーリケの血の通つたものである。馬車を降りて森に足を入れた音樂家夫婦は籠を離たれた鳥のやうである。

「遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の聲聞けば、我が身さへこそ動がるれ」これは名もなき遊女の歌と傳へられる。悲しい歌である。煩はしい人の世に煩はしい人間關係に縛られてゐても遊び戯れる子供の聲を聞くと思はずひとりでに身體が宙に跳ね動く、自然から離れた生活に閉ぢこめられてゐるのだが身體に自然は殘つてゐた、童心は失はれなかつた。わが身さへこそゆるがるれ、涙の微笑が感じられる。メーリケは幾つかの童話も作つたが、モーツアルトの小説には隨處に童話が、童話の雰圍氣が漂うてゐる。モーツアルトの童心とメーリケの童心が觸れ合つて奏でられた音樂である。

藝術一途に生きながら煩はしい人間關係から脱れられず絶えず苦しめられながらもモーツアルトの中の自然はいつもわが身さへこそゆるがるれの素朴さを失つてゐない。そこから自然のままの振舞が生れて來てこの小説を樂しい作品にしてゐる。だが同時にこの藝術家にはいつも死の豫感が離れない。それは隙間風のやうに通り過ぎる背筋の寒さに似てゐる。旅の一夜を偶然の機緣で――それもモーツアルトの自然兒らしい、しくじりからであつたが――ある伯爵の居城で過すことになつた。ここでも彼の音樂は愛好されてゐて、歡迎され、自曲の演奏もなした。折柄この邸で娘同樣に面倒を見てゐるオイゲーニエは音樂の天分があり、今崇拜する音樂家の前でその曲を歌つて彼を感激させた。次の日モーツアルト夫妻が旅立つたあと、モーツアルトが彈いたピアノに鍵をかけ、彼の指が觸れたピアノは神聖なもので他の指に觸れることを封じてしまつた。オイゲーニエはこの音樂の天才は餘りにも早く己を燒きつくしてしまふのではないかと感じたからであつた。そして何よりもそれを恐れ哀しむの

だつた。昨夜歌つた樂譜を片づけようとして樂譜の整理をした時、一枚の古い樂譜がすべり落ちた。それは何度も歌つたことのあるボヘミアの民謠だつた。今それを見てオイゲーニエは色を失つた。ふとした偶然は不吉の神祕となる。オイゲーニエはこの神祕をどんな風に理解しようとしてみても、熱い涙がはら〳〵とこぼれて來る。

森のどこかで樅の苗木が綠の芽を出す、どこかの庭に薔薇が一本、おお魂よ、汝の墓場に根づいて育つ定めに今から選ばれたものなのだ。

黑い若駒二匹が飼草食べて、町へと歸るさ、とんだり跳ねたり元氣一杯。汝の屍體を運ぶ時にはしづしづ歩まう、知るや知らずや、火花が今とぶ蹄の鐵がはづれる時まで待たぬだろ。

わらべ歌の調子でこんな意味の歌がこの小說の結びをなしてゐる。諸行無常の哀しみは寂滅爲樂の餘韻を含んでゐないだらうか。樅は綠に薔薇の花は赤い。極樂淨土と言へば佛敎めくが、佛典の極樂淨土の空想にはたしかに童話の心が宿つてゐる。金、銀、瑠璃、瑪瑙、七寶合成は童話のお城である。大人は慾が深いから慾でつられて有難やと隨喜するかも知れないが、極樂淨土の有難さは童心の空想から出て來たからではないだらうか。死の豫感の恐しさは若駒の驅ける脚の音にまぎれ、墓の暗さは樅と薔薇に彩られ、童話の國に入つてしまふ。珠玉のやうな小說と稱されて居るが、珠玉のひびきがある。

荒唐無稽の面白さは下心なく生れ出た所に、そのものを信じる純粹さに基づくのではないか。宗達の風神雷神の面白さもそこにあると感じられる。メーリケの詩に理想の眞實といふのがある。昨日森の中で眠つたら、幼なじみの少女が樫の梢のずつと高い所を指さして郭公鳥を示した。幼い時に思つた通りきれいな羽で大きな鳥だつた。だからよ、これがほんたうの郭公鳥。小さくてみすぼらしくて灰色の羽毛と近ごろ誰かが言つたつけ。だが夢で見たのがほんもので、大人の言ふのはうそつぱち。と子供心の反撥を歌つた詩人はかつこうと鳴く聲に似合

ひの夢の鳥を信じてゐる。子供の時に好きだつた女の子が指さす鳥のほかに郭公鳥はない。そんな郭公が詩人の目には見えるのだ。

メーリケの空想は更に巨人の童話を生み出す。Märchen vom sichern Mann 一體これはどう譯したらいいのだらう。恐いこと知らずの男といふ意味なのだらうか。無畏無敵と解していいだらうか。ともかく昔も昔大昔、ノア洪水以前に遡る。シユワルツワルトにいぼいぼの大きな不細工な岩があつてその形が醜い蟾蜍に似てゐる。これがまだ生きた大蟇であつた時、之を母とし、父は半神の勇者だつた。受胎すると大蟇は石と化し、父は息絶えてしまつた。それで石の中で眠りつづけること九ヶ月、十月目になつてあの大洪水が始まつた。かがなめて日には四十日を夜には四十夜を雨は降りつづいた。だが巨人の卵は、ものみなが死滅して行く外界から安全に守られて、石の中で眠りつづけ生き永らへて來たのである。雲突く大入道で肩も背もがつしり力強く、昔は裸ん坊だつたが、有史以來は毛皮の衣に大靴の裝ひ、頭は剛毛で、髯は針のやう。こつそり散髪屋が洞穴に入つて來て、植木屋が刈込むみたいに大鋏でばりばり。この巨人は無敵の無法者でおまけに大の怠けもの、大喰ひで百姓どもから徵發するし、夜中に山から下りて怒りが湧くと道しるべを踏みつぶすいたずらをやるし、雪の畑に寢ころんで起上つてその寢た跡の己が姿の寫しを見ては山をゆるがすばかりの高笑ひ。この人間の手に負へない怪物が眠つてゐる所へ神々の寵兒ローレグリンがやつて來て智慧づけをする。これは神々の座ではおどけもので、南太平洋上の無何有の島オルプリートの女神ワイラの子である。この島のことは「畫家ノルテン」の中に出て來る。

今この神々の道化が語る言葉を巨人は夢うつつの間に聞く。四十日の洪水の間眠りつづけてゐる時、神々は巨人の卵に祝福を與へ、天地創造の始めからすべての民族のはてまで、王の座が入替り立替り移り行く先きの先きまでもその夢に見せ、尙その上に神々の祕密の智慧までこれを見せてしまつたといふ。所で冥土の亡靈ども、別

して古の世の賢者、勇士は今を悲み、己が非運を採るが、如何せん、言葉がないので思ひは叶はず、神々の智慧を目のあたりに見た巨人を待つてゐる次第。それをば知らず何をしてゐることか、頭の中の煤を拂つて神々の啓示を集めて本に書き、亡靈どもに說き明してくれ、汝は冥土の門に立つても入ることを恐がる男ではないからと勸誘する。と聞いて巨人は氣も動轉、頭の中は大混亂、いらざるお世話とうなつてみたが、正氣に歸ると神々には反抗するより從ふがよいと彼の精神は警告する。肉體の巨塊は今や精神が目覺め、先づ本作りにかかることになる。山から下りて村に入ると夜番は十二時を告げ、寢靜まつた明るい月夜。つと歩み寄つて手近の納屋の前に立ち、二つの扉の縱橫測つてこれを蝶番からはづす。次ぎ〳〵にはづして十二枚、これをもつて洞穴に歸り、夜が明けると繩で綴ぢて本は出來上つた。手作りの本を見てゐると精神がのびて來て、巨人は早速大きな炭を手にとつて、本の前に腰を下ろすや力の限り書き出した。書きも書いたり一日半、飲食する間も惜しみ、ぎつしり書きつめ、子供の頭位の終止點を打つとほつと一息、ばたりと閉ぢて立上つた。

さてそれから死者の國へと出發だ。北へ北へと歩くこと七日、地下へ足を入れて二十四時間めぐりめぐつて行くと、薄暗い所に亡者は群れ居る、入口の汚いのは下層民の居る所なので、年の市の雜沓のやうな混亂ぶりだが、喧嘩口論が得意だつた彼等も蚊の鳴くやうな聲しか出ない。奥へ進むと王者、英雄、歌人が月桂冠をつけて或は歩き或は坐してゐるが、みんなだんまり。巨人は手に世界の書をもち、周りに皆を集め、帽子と杖を愼重に横におき、額の汗を大きな手で拭ひ、咳拂ひ一つしてやをら講義にとりかかる。さながら大學教授氣どりである。天地創造から說き起すと亡靈どもは神妙に耳を傾ける。所がそこへひよつくり招かれぬ客、角をはやした惡魔が割りこんで來て邪魔をする。演說者の後に來て顏をしかめたり、舌を出したり、とんぼ返りをしたり、みんなを笑はせようと懸命。巨人は素知らぬ顏で講義をつづける。そこで惡魔は圖に乘つて、重くて長い尻尾を敎授の上着

のポケットにつつこむ。巨人は右手で尻尾を摑むが早いかぐいと根元から引つこ抜く。ぷつり、さあ大變、惡魔は傷口抑へ、痛さにきりきり獨樂のやうに廻り、傷口からは黑い血がどつと出る、くるりと向きをかへ己が住居の地獄へ一目散。巨人は尻尾を眺めて思案顏、さてそれから後が豫言者の言葉となる。惡魔は危害を何度加へるか。一回目は今御覽の通り、時滿ちるまでは二度、三度ある。そこで三度尻尾を拔くことになる。惡魔の尻尾は二度、三度生えるが、その度毎に三分の一づつ短くなつて、それに應じて勇氣と力も減じて行く。老いては子供同然、乞食となつて侮られるのぢや。その時こそ地下も地上も祝祭の日が來る、我輩は神々の仲間入りして寵遇を受けるのぢや、と語り終つて尻尾を栞代りに本にはさみ、今日はこれまでと本をぱたんと閉ぢて脇にかかへ、帽子と杖をとつて去る、あとは萬雷の拍手がながくひびいて止まず。時に柳の枝に蟬の姿となつてゆらゆらゆれながら一分始終を見、聞いてゐたローレグリンは神々の所へ一足跳び、一つ洩らさず報告し、高天原は神笑ひに笑つて宴に一層の味をつけましたとさ、で終り。

空想豐かな笑ひについでボーデン湖畔の牧歌がある。自然の中で暮し、自然一如とも言ふべき村人たちが登場して來る。ここでは二つの話が交錯してゐる。老人と若者と。一つは鐘盜人の話である。湖畔の村は武陵桃花源と云ふほどではないにしても、やはり無何有の鄕である。丘あり、果樹、葡萄が茂り、修道院と湖上を交易する船を宿す村とを隱す丘並の裾に今は人住まぬ敎會堂がある。年古りて甍破れては霧不斷の香を焚き、樞落ちては月常住の燈を挑ぐとも言ふべき有樣である。塔一基高く聳えて日がな一日遠く擴がつた湖を、その上を走る帆掛船を、更に向ふ岸に延びてゐる町や村を澄んだ空氣にはつきりと見ることが出來る。そしてその彼方には天まで高く白銀に照り輝く肩を大きくもたげた山々があるといふ風景である。陽が西にかかつた頃ここの塀が影を落す所に村の仕立屋と若い者が草刈りの一休みに一杯やつてゐる。そこへ漁師のマルテインがやあとばかりに仲間入

りをする。この老人年は七十だがまだ達者で、頭はぼける所かよく働いて口達者、若い時には人をかついで面白がつたが今は眞面目腐つた顏付をしてゐる。酒のやりとりからこの會堂は昔からさびれてゐたのかと尋ねられて老人は昔話に委しい。そこで長々と語る緣起物語。話のうまいものは作り話もうまい。老人がまだ十八の頃だつた。その頃花嫁は婚禮三日目に面を包んで仲良しの連と二人だけでお詣をする、拜んだ後で鐘を撞いてもらふと靈驗あらたかといふ。どんな靈驗か、それには長い謂因緣がある。ここの修道院の院長樣に姉さんがあつて、分限者の未亡人で子供がなく、命終の時に當つて山林田畑財寶を修道院に寄進した。そこで院長は故人の冥福を祈つて修道院の近くに禮拜堂を建てることにした。建立に先立つて土地を掘返した所が、鍬にかちとあたつたのは三鈷の鼎、そのほか刀や斧や供への器が出て來た。昔ここにはローマ人が住んでゐたので、軍神の鑄像も出て來た。これは異敎徒までが鐘の寄進に差出した金銅で目出度い吉兆。衆議の上貴重な品は修道院に殘し、他は鑄つぶして鐘を作ることに定まつた。

建築は捗る、鐘は出來る。その出來榮は素晴らしく一點の非の打ち所もないのに、何としても音を出さない。昔異敎の神が血の犧牲を受けた金銅の故に惡魔が中にひそむときはまつた。いつそ湖底に沈めて災難を未然に防がうか、いやいや水の底で魔物が暴れたら大洪水で何も彼も破滅にならう。といふわけで惡魔拂の呪文に長じた神父が呼ばれ、呪文を唱へる、鐘は輾轉とのたうち、惡魔は一陣の風となつて飛び出す。神父は鐘に水をかけ、口を近づけ、「南無マリア、御名の麗しきが如く御聲もしかあれ」と祝福を與へて鐘供養は無事に終つた。鐘の妙音は、これに祈れば啞聾の子供は生れない功德があるとの噂を擴め、近鄕近在の善男善女の參詣が絕えず、殊に若い女のお詣りが多かつた。だが時が經つうちに信仰は衰へ、參詣の善女をからかつたり、いたづらをする不とどき者が出るに至つて、さびれる一方。その上にあの鐘は盜まれて二代目だから音が惡くなつたとか言つて、

昔を今にと願つても甲斐なく、年と共に堂は朽ちて今のやうな廢寺になつてしまつたと長い昔話が語られた。

さて漁師が語り終ると、仕立屋は鐘の行方が何よりも氣がかりで、その鐘は賣られたか、盗まれたかと聞くと、漁師は眞顔で一寸おどけて、人間は知るより知らぬがましぢやと、知らぬことなら鼻の先にぶら下つたとて盗んで心に重荷を負はせることもなく、慾の陷し穴も避けようものを。所で鐘ならちやんとあそこに懸つてゐる。ここから歩いて三十歩、葡萄山の横の石切場に上つて胡桃の木の所まで行けば破れた鎧戸から下の反つた所が半分出て居るのが目を凝らすと見える。これは誰も知らぬ。村長さんにだけは言つておいたが、噂が立つ前に何とか手を打つてくれればよいが。目方は三百ポンドはたつぷりある、一ポンド一グルデンと踏んで、勘定は自ら出來る筈ちやと言はれて仕立屋はのぼせ上つた。漁師はどれ、日も傾いたと腰を上げて立去ると見せかけて、こつそり戻り、耳を壁におしあてる。壁に耳とは夢にも知らず仕立屋は連れの若者に言葉巧みに持ちかける。かねて若者が欲しがつてゐた帽子で釣つて腕つぷしの强い若者を引入れて、してやつたりと懷勘定。鐘はもとよりあらばこそ、惡戯てんがうに明け暮れした若き日の名殘りの殘紅を頰に咲かせて老漁師は壁から耳を離して夕陽の中を立歸つた。

ここで詩人は村のミューズに呼びかけて、足を停めて道草食つて、今度は若い者の惡戯てんがうを一曲所望と話は一轉して若い者の色戀沙汰に移る。純情な青年が戀した乙女は器量好しだが、玉に瑕は父親讓りのお金握り、子供の時に駄菓子買ふ銅貨が握り拳に汗びつしよりだつたと云ふ。ある日のこと、村の若い男女が湖の島に舟遊びして歸る時、丁度夕陽に湖面は輝く、戀する女とならんだ男は嬉しくなつて、歌はうぢやないかと音頭とり、みんな聲を合せて樂んだ。所が女は器量自慢だが聲が惡くて歌は嫌ひ、私にあてつけて歌ひ出したのだと大むくれ。舟が岸に着くと見向きもしないでさつさと獨りで歸る有樣。若い男女はそれぞれ戀仲で仲よく連れ立つて歸

るのに一人殘された男は無念やる方なく、そつちがそつちならこつちもこつちとそれからは訪ねても行かなかつたが、男は船頭の息子で親の言ひつけでしばらく村を離れてみると戀しさ百倍、女も待つて居らうと出かけた所、前からこの女に申込んでゐた薄野呂の粉屋が金のあるのに母親が乘氣になり、娘を說きつけ承諾させて結納もすんだと寢耳に水の噂を聞いて頭から水を浴びせられたやうにびつくり仰天。

村の若者たちは情が厚い。みんなこの結婚に腹を立てた。婚禮の招きには誰も應ぜず、みんな素知らぬ顏。中にも前の話の老漁師の息子は俠氣があつて親讓りの茶目で、男の純情がわからないで金に惹かれる女は忘れてしまへと友を慰め、勵まし、舟遊びで歌を樂んだ羊飼ひの娘が友を思つてゐることを知らせる。若い男女が好きになるのは自然で、婚禮の日の朝まだき湖畔、男と羊飼ひの娘は共に思ひを打開け、暗雲は輝く朝日の前に霧散する。漁師の息子は友のために復讐の宴をたくらむ。婚禮の夜、大きな夫婦人形を作り、花嫁の荷物を積んだ車をこつそり引き出して、村の若い者たちは森の草地に集り、世帶道具を取出して持寄りの大盤振舞ひ、流しの樂師を呼んで大騷ぎ、夫婦の人形はそれを默つて見物役、おまけにパン屋の若い者は赤坊のケーキまで作つて祝ふやら、村では婚禮の宴に年寄ばかり集つてゐる時森の中ではこの騷ぎ。夜が明けてから村では花嫁の荷物がないので一騷ぎ、花嫁はさすがに恥ぢて出て來なかつたが、薄野呂の花婿はのこのこ探しに村の人たちと一緒に出て來て、全財產が無事なのを見とどけたのはいいが、赤坊のケーキをむしやむしや食べる食ひ辛抱。だが荷物は無事に水車小屋にとどき、花嫁もそこへ落ちついて先づは目出度し。そしてその日に純情な若者は羊飼の娘との間に婚約成つて目出度くおさまる。

さて鐘盜人の方はどんな結末になつたか。年をとると誰しも昔がなつかしい、昔語りをすればまた若返る。七十歲の漁師はありもしない鐘て釣つておいて、鐘盜人どもが申合せをしておいた日には一足先きに鐘樓に上つて

雨ざらし日ざらしの穴だらけの大きな三角帽をぶら下げておいた。知らぬが佛の仕立屋は若い者を連れて、梯子、龕燈、繩に鑪にやつとこと用意怠りなくやつて來た。だが心の中はびくびく。神聖冒瀆の罪が罰せられた昔話は數々聞いてゐる。昔マリア樣を盜んだ奴があつた。マリア樣がじつと辛抱して居られると盜人は圖に乘つて先づ御手の金の寶珠をとり、次いで肩から銀の外套を剝ぎ、いよいよ圖太くなつて御頭の寶冠に手をかけたとたん、マリア樣の手がのびて盜人をむづとかかへて離さなかつた。次の朝參詣人が來て見れば盜人は御手の中で息絕えてゐた。この話を思出すと背筋が寒くなるが、なあに高が鐘だ、それにあの鐘だつて盜んだ奴が代替に持つて來たもの、賣つてしまへば買つた奴が舟に積んで湖水を渡る時に鐘がだん〳〵重くなつて沈んでしまふ。それはこちらの知らぬことと勇氣をつけて樓上に上れば、ものもあらうにこの破れ帽子、あたりはしんとしてゐる、破れ扉から風が吹きこむ。そこへ突然クラリネットが鳴つて梟がばた〳〵飛出す。天罰覿面。そこへぬつと顏を出した漁師の爺があははのは。仕立屋はすつかり降參、酒三升で勘辨をと嘆願して手打ち、先づは無事にけりがついたといふ話。

この牧歌はゲーテの「ヘルマンとドロテーア」に比較される。抒事詩として、又牧歌的な內容からもすぐに較べられるのであるが、もとより兩者は別物である。ゲーテは都會人であり、メーリケは田舍者である。同じく自然を愛し、自然に參入したとは云へ、メーリケは自然觀を展開することなく、鄕土色が感覺的に濃く出て居る。村の人間、土地の自然が浮彫りとして出て來るばかりか、作中の人物が口から話す言葉が長くつづき、その話し方が樂しい。メーリケは詩作活動の期間は短くて一冊の詩集を出したあとはモーツアルトの小說とこの牧歌が名殘の餘韻として響き出たのに止つて、園藝や陶器作りやその他いろんなことをやつたらしいが、それは趣味生活に安んじたとも言へないやうだ。晚く結婚して子供もありながら別居した家庭の事情もあり、貧しさには斷えず

苦しめられたのであつた。だが彼の心境は「よの中に交らぬとてはなけれどもひとり遊びぞ我れはまされる」が一番近かつたのではないだらうか。勿論良寛の人柄と似てゐるといふのではない。童心を持ちつづけたことは共通してゐると見てよからう。形のあるなしにかかはらず童話の持主であつた。焚くほどは風がもて來る落葉かなこれはメーリケ傳の讃にしても似合ひさうだ。自然を、人間の中の自然を愛したメーリケはいつも愛する心を失はなかつた。それはむづかしい深い思想を宿す心ではなく、目に見えるもの、耳に聞えるものを通して、それに卽應して感じ、考へるのであつて、苦惱の體驗もこれを前面に押し出したり、心の亂れを露はに示すことを好まない。若き日のペレグリーナ體驗は戀の歡喜と苦惱とであつただらう。この謎の女の俤は「畫家ノルテン」の中のジプシイ女に表現されてゐると見て間違ひないであらうが、詩篇として殘るペレグリーナ以外のものは詩人が湮滅してしまつたから今は知る由もない。女は謎の如く現れて謎の如く消えてしまつたらしい。後には闇の靜けさが殘るばかりだつた。メーリケは靜けさを求め、靜寂を好んだ。彼の求めた靜寂は陽のあたる靜寂である。

美しい山毛欅の木が一本森の中に立つてゐる。木の周りは枝のとどく限りまるく芝生の草原があり、自然は何の技巧も用ひずしてこの麗はしい圓陣を作つてゐる。草原の周圍には先づ灌木の茂み、そしてそれにつづいて樫、樺の木立が鬱蒼と生ひ連る。岩に隱れて見えないが、徑が急に下るあたりは明るく向ふには野が開けてゐるのだらう。詩人は夏の眞晝時にふとここに足を踏み入れた。もの音一つなく靜まり返つてゐた。綠なす絨緞はさながら宴の席に招くが如く足を迎へ、詩人は今そつと足を入れ、木にもたれて四顧した。火のやうに耀く太陽は木の蔭受けた圓陣の周圍にまばゆい光の輪の緣取りを作つてゐる。立つたまま動かず詩人の內なる耳は無量無邊不可思議の靜寂を聞く。日光の魔法の帶に共にくるまれて詩人は孤獨の靜寂を膚にぢかに感じ、ただそればかりしか心になかつた。夏の眞晝の炎天の下、牧神も眠る靜かな森、綠の圓陣の中に立てる一本の山毛欅の木、この童話

風景の中に孤獨の寂寞がある。

又われわれは一つの古いラムプを知つてゐる。美しいラムプはかつて人の集ひ、宴の座となつた、そして今は來る人なく忘れ去られた豪華な部屋に尙そのまま移らずに天井から垂れてゐる。白い大理石の笠蓋は金と綠で蔦葛が緣飾りとしてまとひつき、その面には子供の群が嬉々として輪踊りに興じてゐる。その美しさ。笑ひつつ、しかも嚴蕭の柔和な精神が全體の形にあふれてゐる。葡萄の葉飾りに醉ひしれた酒神の巫女の亂舞はここにはない。蔦の飾りに子供の踊り。これこそ眞の藝術像なのに、顧る人あらばこそ。だが美なるものは、それ自身の中に滿ち足れりと見える。

所で最後の一句である、Was aber schön ist, selig scheint es in ihm selbst. 先づ selig といふ言葉の意味はどうとればいいのか。ここの使ひ方についてはゲーテのファウストにその先例があると注釋家は敎へてくれる。第二部第二幕の古典ワルプルギスの場にファウストを背に乘せて走る天馬ヒロンの言葉の中に Die Schöne bleibt sich selber selig とある。鷗外の譯によると、美の尊さは獨立してゐる、とある。少しいかめしすぎるやうな氣がする。と言つて誰に見せうとて紅鐵醬つけてといふ風にとればしをらしくなり過ぎる。辭書をあけると、in einem Zustand sich befindend, wo der Geist in voller, ganzer Befriedigung zu wonnevollem Wohlgefühl und Glück nichts weiter bedarf とあるから、他に求めることなき滿足といふのであらう。顧る人なくても美はそれ自身の中に安心ありといふ意と解しておく。ここで ihm selbst は sich selbst の方言的な使ひ方といふことをシュタイガーに敎へられたのは有難かつた。次に scheint の意味である。シュタイガーはゲーテがはつきり斷言した所をメーリケが見えるらしと言つたのは末葉であるからだと解してゐる。之に對してハイデッガーが異議を唱へシュタイガーに長い手紙を二度出してゐる。最後の一句の解釋が felix in se ipso videtur とあるに

對して feliciter lucet in eo ipso とハイデツガーは解して詳細な解釋をつけ加へてゐる。scheint を光る、照り耀くと解するのはヘーゲル美學と關聯してであつて、第一の手紙では專門外の者には多少行きすぎと思はれる節もあるが、第二の手紙では全體にわたつて詳細な解釋がなされてゐるので哲學のわからぬ者にとつても讀むことができる。シユタイガーの解釋にしてもハイデツガーのにしてもそれぞれに興味あり、こんな風にも解釋できるものかと敎へられる所が多い。またどちらも西洋の敎養を深く身につけてゐる人だから、その廣さ、深さには驚歎する。お蔭でよい勉强になつた。だがメーリケの詩を讀直してみるとすぐそのまますべてが役立つわけではない。淺學は承知の上ではあるが、救ひにも上品上生から下品下生まであるのであつて、他日もつと深く入つて行くこともできるであらう。東洋には、好讀書。不求甚解。每有意會。便欣然忘食。といふ五柳先生を敬慕する末輩があつて、あまりむづかしく言はれると意に會ふある所を見失ふ恐れなしとしない。だが冒頭に引用したシユタイガーの言葉は解釋學を提唱する學者の體驗を語つたものとして興深い。觸れ合ひは機緣であり、他生の緣とも言へるかも知れない。またハイデツガーの手紙の終りの言葉はむづかしいが興味深く讀んだのである。卽ち Lesen aber, was ist es anderes als sammeln: sich versammeln in der Sammlung auf das Ungesprochene im Gesprochenen? といふことは何度も繰返して讀む中に四方八方から細流が合して理解の川幅が擴がるといふ希望を與へてくれる言葉と解釋して、それ以上にむづかしくしないでおく。

メーリケの詩の中に「祈り」と題する短いものがある。主よ、汝の望むままに、悲喜いづれなりとも賜び給へ。汝の御手より出づるものならば、われいづれにも滿足せん。喜びにあれ、悲みにあれ、わが身を埋め給はざれ、過ぎざるにこそ微妙の中庸のあるべければ。と言つたやうな意味のものである。メーリケの信仰がどのやうであつたかは知らない。だがこんな祈りを歌ふメーリケの心の謙虛さは感じられる。渡しにし身にしありせば今より

はかにもかくにも彌陀のまにまに、ここにも謙虚な心がひびいてゐる。そして童心は謙虚な心がなければ宿らないのである。

これは私のメーリケへの理解の一歩を記したものであつて、教を受けたのは前記の二人のほかに舊マイヤー版の Harry Mayne、次いで詩人の Goes、ゲースのメーリケは小さな本だが、實に興深い讀物であつた。それから詩の解釋で詩に接近する導きを與へてくれたのは Giuliano Guardini: Gegenwart und Geheimnis である。このほかの文獻について御存じの方はどうか教へていただきたい。